

2025 年度 (令和 7 年度) 学校評価自己評価表

向丘中学校区	校番 8	福山市立向丘中学校
最終更新日		2025年(令和7年)2月25日

I 福山市

ミッション	福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン	各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 ・思春期の子どもたちを指導するのは大変だと思いますが、「主体性」と「感謝する人間力」を育む教育を引き続きお願いします。	児童生徒の現状 ・行事や各取組において、挑戦したい内容を協議した上で、仲間と実現を目指す姿勢が見られる。 ・学習に粘り強く取り組む生徒が増えてきた。 ・個々の様々な状況が要因となり長期欠席に陥る児童生徒が増えた。	育成する資質・能力 めざす子ども像(義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	主体性、自己理解、課題発見・解決力 人とのかかわり合いを大切にし、学ぶ意欲を持ち、自分の生き方を主体的に考える子ども ○自校の取組を深く理解し、自主性・主体性を発揮し、「子ども主体の学び」の実現に向けて取り組む。 ○各校の実践や研究についての交流を深め、職員の主体性の向上や意識改革を図る。 ○お互いの具体的な実践交流から課題意識、自己研鑽の意欲を持ち、個人的に授業参観、放課後の相談等の教職員が起点となる研修を推進する。
--	---	---	---

III 自校

ミッション 「自校や郷土に愛着と誇りを持ち、仲間とともに貢献する生徒を育成する。」	育成する資質・能力	○自らが求め挑戦する力 ○出会う課題に向き合い解決する力
学校教育目標 「感謝感動の心と貢献する心を大切に持ち続けることができる生徒の育成」	めざす子ども像	○夢と志を語り、新たなことへ挑戦する生徒。 ○自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる生徒。 ○人を大切にし、他者との良好な人間関係を築くことのできる生徒。
現状 ＜児童生徒＞ ○教育面談週間の推進で、教師との信頼関係が積みあげられている。 ○「きらり」の推進により、公的貢献意識および自己有用感が高揚している。 ○他者の意見へ依存する傾向があり、自らの考えを深めたり、広げたりする経験が少ない。 ＜授業＞ ○単元を通しての問いや見方・考え方、活用方法などを積み重ね探究することにより、生徒の主体的な学びの姿が見られるようになってきたが、全国学力・学習状況調査の正答率が県市平均より低く、基礎学力の定着に課題がある。 ○定期考査前には補習教室を実施したり、タブレット端末を活用したりして個々の学びの状況に応じた学習の展開ができています。また、長期休業中には自主学習のための教室解放により、学びの集団ができてきた。	テーマ 毎日の授業の中で、「生徒が学びの価値を実感できる授業」を全教科で推進 内容等 ○全生徒を対象とした教育面談週間を設定。 ○生徒及び教師がともに挑戦する授業を展開。 ○特活を起点に据えた共感的・協働的な学びの場を設定。	めざす授業の姿 ○生徒も教師も一生懸命に授業に取り組んでいる。＜基礎基本の定着＞ ※基礎学力の定着に向けて繰り返し学習を推進。 ○生徒が見方や考え方を探し、思考表現している。＜主体的な学び＞ ○指導と評価の一体化を図り、生徒が「学びの価値」を感じられる授業を行う。 ＜進路実現＞

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標 ●校区共通	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	7/25 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況	7/25 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
3	「学びの価値が実感できる授業」の実現	★	継続	授業改善に取り組み、子ども主体の学びを実現する。	・授業で学んだことへの興味や疑問を探究し表現する時間を各単元題材において設定する。	●生徒アンケート「授業で考えることは面白い」と感じている生徒の肯定回答を全教科で70%にする。(前年度62%)	生徒アンケート「授業で考えることは面白い」と感じている生徒の肯定的回答は78%であった。(前年度7月68%)	3	4	日常生活から生まれた興味関心や疑問点を、教科の学習に結び付ける。話し合い活動の場で、自分の考えを積極的に表現しようとする環境を整える。	日常生活と結び付けられるような題材を選択し、教員が授業参観することで授業改善につなげた。生徒アンケート「授業で考えることは面白い」と感じている生徒の肯定的回答は72%であった。	3	4	4	教材研究と生徒の実態把握を軸に、学年会や教科会を通じて共有し、生徒の思考がさらに深まるようにする。
				基礎学力の定着とともに、発展・活用的な課題へ挑戦する意欲を養う。	・入試問題や発展的、活用的な課題を単元テスト、定期考査等において設定する。 ・学年の実態に応じた朝学習を行う。	・挑戦問題において無解答の生徒を、全教科25%以下にする。	挑戦問題において生徒の無解答率は13%であった。	3	4	学習する習慣をつけ、基礎学力の定着を図るとともに、引き続き入試問題や発展・活用的な課題へ挑戦する場面を設定する。	基礎学力の定着を図るために、ドリル学習等、繰り返し学習を取り入れた。挑戦問題において生徒の無解答率は12%であった。	3	4	4	教材研究や授業づくりを通して、生徒に応じた問題演習を行い、学力の定着を図っていく。
3	「自律・貢献」できる生徒の育成	★	継続	生徒の自己肯定感を育み、自己実現に向けた意欲を向上させる。	・生徒が主体となる「特別活動」を通して、協働的な学びの場を充実させ、キャリアログや振り返りをもとに評価、面談を行う。	・生徒アンケート「自分のよさはまわりの人から認められていると思う」肯定回答を85%以上にする。(前年度80%)	生徒アンケート「自分のよさはまわりの人から認められていると思う」肯定的回答は85%であった。(前年度7月81%)	3	4	「きらり」放送や全校表彰を継続する。教員や生徒同士による肯定的評価や声掛け・振り返りを通して、周囲から認められる喜びを実感できるようにする。	生徒アンケート「自分のよさはまわりの人から認められていると思う」肯定的回答は84%であった。(前年度12月80%)	3	4	4	生活面に関するアンケート項目は全て昨年度より向上した。生徒会執行部を中心に自律・貢献活動を推進し自己肯定感や自己有用感を向上させていく。

		★	継続	生徒一人一人を大切にされた個別支援の充実を図る。	・欠席率、アセスの結果、日々の生活の様子を教員で共有し、各学年で計画的に個別対話や評価面談を実施し、個に応じた支援を行う。	・長期欠席者の出現率を6.0とする。(前年度6.8)	長期欠席生徒は8月末段階で12人。出現率3.2だった。(前年度4.0)(新規長欠者2人)	3	4	担任が個別に対話できる時間を確保する。また相談室や家庭連携で得た情報は、生徒指導委員会や各学年で速やかに共有し、個に応じた支援に生かしていく。	長期欠席生徒は1月末段階で26人。出現率は7.08だった。(前年度5.72)(新規長欠者8人)	3	3	3	「ここタン」を活用し、生徒の心のSOSを把握し、教職員全体で迅速に対応していく。生徒指導委員会を中心とした生徒指導体制で、生徒一人一人に対して丁寧な支援を行う。
3	学校組織力の向上	★	新規	教職員同士が分掌・学年の枠を越えて協働し、職員室内の同僚性向上を図る。	・主任主事を中心に、業務の可視化を図り、全教職員が見通しを持って業務にあたる。	・教職員アンケート「自分の挑戦に対して協働してくれる仲間がいる」肯定的回答75%(前年度68.8%)	企画委員会を通して、各学年の取組内容の成果や課題を共有できた。教職員アンケート肯定的回答は64.7%だった。	3	2	学年行事や教科の取組を職員室内に集約し明示する。他学年の動きを把握し、横の連携が活性化できる体制を整える。	主任主事を中心に行事の運営企画の連携を取り、最大限の教育的効果が発揮できるよう体制を整えた。教職員アンケート肯定的回答は38.9%。	3	3	3	月別行事予定表に教科会、分掌会を計画的に位置付けて、職員全体の意見を企画委員会で反映できるようにする。
			継続	教職員が主体性を発揮し、やってみたい実践を実現できる学校づくりを推進する。	・特活や行事の充実を図る。子ども達と共に挑戦し続ける環境を構築し、達成感を学校全体で共有する。	・教職員アンケート「仕事にやりがいを感じている」肯定的回答75%(前年度68.8%)	2年企業講話など、新たな教育活動を実践できた。教職員アンケート肯定的回答は47.1%だった。	3	2	各学年の取組内容を全体共有し、特に成果をあげたものは、次年度に向けたカリキュラムに反映させていく。	各学年の特活や行事を見直し、学校全体でキャリア教育を柱に据えた取組を主体的に実践できた。教職員アンケート肯定的回答27.8%	3	3	3	学年をまたいだ取組や地域連携を活性化し、生徒の学びの意欲を多面的に支えられる環境づくりを推進する。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。